

編集室

* 昨年の6月に編集特別幹事として就任して以来1年が経過し、やっと幹事としての仕事の全体像が分かりました。この間、編集委員をはじめ、御執筆者や事務局の皆様には大変お世話になりありがとうございました。これまでは、目の前の仕事をこなすのに追われていましたが、今後は全体を見ながら更に充実した会誌の企画を行いたいと思いますので、今後も御指導のほどどうぞよろしくお願い致します。

* 最近、経済・産業・情報におけるボーダレス化、グローバル化が進んでいます。教育研究の分野においてもそれは例外ではなく、世界規模での情報の共有化や人材の交流が進んでいることは皆さんもよく御存じのことと思います。電子メールによる情報交換をはじめ、今ではインターネットを通じて世界中の研究者との間でビデオ会議がリアルタイムで行えるようになりました。筆者も国際プロジェクトの実施の際にビデオ会議を利用しており、大変重宝しています。

* しかしながら、教育の現場においてはこのグローバル化の潮流とは逆行した気質を最近の学生たちに感じます。筆者が所属する大学でもグローバル化を意識した幾つかの授業があります。企業の技術者・研究者による授業や外国人研究者による討論会形式の授業がこれにあたります。学生たちはこれらの授業に熱心に取り組んでいますが、質問や討論の場面になると突然皆、静かになってしまいます。皆、誰か他の人が発言するだろうとして他人任せといった具合です。また、海外に留学をする機会を作ってもなかなか海外で長期間勉強したいという学生や若手研究者からの希望が出てきません。ほとんどの学生は、国内の安定した就職口を見つけるために大学で勉強をしているようです。

* 最近、海外の大学の研究室を訪ねると日本人の留学生がほとんどいなくなったのに気がつきます。少なくとも15年ほど前には、海外の研究室に日本の大学や企業から派遣された多くの日本人留学生がいました。(ただし、他の国からの留学生に比べて日本人留学生は文字どおりの遊学だったこ

とも事実です。)これは、見方を変えれば、日本の教育研究がグローバルな水準に達し、もはや海外に学ぶべきものはなくなったと見ることもできます。しかしながら、先に述べた学生の気質を考えれば、これは明らかに誤りであることが分かります。今や教育研究の現場において日本は鎖国状態にあり、ますますグローバル化とのかい離が進んでいるというのが率直な感想です。

* グローバル化とは海外(特に米国)の考え方や方法を取り入れて、世界規模で均一化された価値観で物事を見ることであると考え節があります。これに対して筆者は、グローバル化とは世界の価値感をよく知った上で、自国や自身の価値観や性質の違いをよく理解し、これを基にどのようにして世界の中で自国や自身の特徴を出すかを考えることだと思っています。幸い日本には、長い歴史と誠実で忍耐強い国民性があり、これは我々のDNAの中に刻み込まれています。この点は、世界的に見ても評価されているようで、グローバル化に際し、我々が認識しなければならないことだと思っています。

* 先日の女子サッカーワールドカップでは、日本チームが歴史的な優勝を成し遂げました。筆者は、この快挙はグローバルな視点を持った選手らが、日本人の体質や気質を生かした方法で世界に臨み成功した良い例として、この試合を見ています。若い学生たちには、ぜひグローバル的価値観を身を持って体験し、その上で自国や自身の気質や特徴をよく理解してもらいたいと思います。そのツールとしての英語は必須ですし、歴史を含む一般教養も重要です。

* 本会誌も今後はグローバル化にどう対応するかを考える必要があると思っています。学生や若手研究者の啓発活動は重要なテーマの一つです。また今後は、質の高い学術情報を発信するハブとしての役割を少なくともアジアにおいて担っていくことを検討する必要があると思っています。

(編集特別幹事 吉川信行)